



町民文芸

只見短歌会 二月詠草

大塚栄一 指導

試験中の孫に代りて節分の豆撒く子の声未だに若し

古川 英子

母と同じ悲しみ抱きて生き来しにわれは母より十年も生きし

馬場 八智

雪まつり風雨となりし最終日祈願花火の冴えて広がる

関谷登美子

凍てしるき朝にて雲のひとつなく聳ゆる白樺に霧氷耀ふ

新国由紀子

節分の豆拾ふ子らも来ずなりて老らを呼びて息子豆撒く

渡部ゆき子

初雪を赤き実を受け弓なりとなりし柿の枝重げに揺るる

小倉キミ子

自ら膝の痛みをさすれるは幸せと言ふ媪穩しき

目黒 富子

定例の会の詠草もまとめられず時の過ぎゆく日々の多かり

渡部ヨリ子

パパママと祖父母四人に甘えゐる幼子は曾祖母われに懐かず

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会 三月例会

目黒十一 指導

失えば失う程に桜散る

洋子

深眠り山の寝息や小雪降る

銀ブラの会話軽やか春の空
買い物を待つてぼんやり春の昼

修一

散歩道への字への字の屋根の雪

味代子

平穏と寒木瓜の鉢届きけり

海を向く黙禱の列冴返る
浅草嶺光と影を浮ばせて

一穂

原発の廃炉百年冴返る

恒夫

三、一黙禱のほか術もなく

遣る瀬なし柩見送る雪の果
俳友の厚き忠恕や花明り

吉児

木の根明く街道に浴う三島桐

礼

空樽を積む北窓を開きけり

離人形祝う人なく微笑みぬ
水温む鳥のさえずり華やぎて

信

亡母へも同じ紅ひく余寒かな

順子

春の雪墓にかかりて羽毛ほど

春寒や箱一杯に置き葉
果樹畑行き交う人に春浅し

都